

「無くてならぬもの」

詩編 127 編 1 節 - 5 節

選句「主はその愛するものに眠っている時にも、なくてならぬものを与えられるからである」

(2 節口語訳)

- 1、今日お読みした詩編 127 編は教会堂の献堂式などによく読まれる詩編である。確かに教会堂の建築は人の業であるけれども、それは神が建てるという根本が失われたら空しいものだ。ここの「家」はエルサレムの神殿を指すと昔から理解されてきた。しかし詩編の研究者の多くは「家」を建物と理解するよりも、家庭と理解している。日本では旧約学者、浅野順一牧師は「家庭の幸福は、その家庭が文化的に完備せるためでもなく、生計を支うべく豊富な収入があるためでもない。・・・唯一のものを欠くならばその幸福は過ぎゆく影にすぎない」(『詩編』P. 398)と述べ、詩編 103 (人のはかなさを草に例える) やルカ 12 : 20 (金持ちの安堵にたいして今夜貴方の靈魂はとられるとの警告) を引用している。浅野牧師に育てられた者たちは、家庭についてそのような信仰の筋を持っていた(先般、一周年記念会を迎えた教会建築家であった拙兄も浅野牧師に育てられた)。
- 2、『信仰 20 年基督者列伝』(1923 大正 10 年、警醒社) という珍しい本の寄贈をかつて受けた。明治 20 年代に入信あるいは伝道者になった 800 余名の素描が記されている。そこで二つのことを思った。第一は、明治期の家父長制と血縁の強い社会で人格の独立と自主が新しい価値観・倫理観として生きられていること。第二は信仰の継承ということ。前者は個々人への神の招きと応答である、後者は何らかの意味で親子、血縁のよるつながりである。例えば 2 代、3 代目のクリスチャンが存在する。2 代目は親の影響はあるが、しかし信仰は各自の決断によっている筈である。血縁が強くなると「檀家クリスチャン」というものになって、決断とか応答の面が弱くなる。岩村信二牧師は『血と契約』という書物で、血縁共同体は下部構造で契約(信仰)共同体は上部構造だ、とその関係を社会的に分析をしている。だとすると「いざ」という時、下部が顔を出して、上部は観念的な役割しか果たさないことになる。つまり、平たくいえば、信仰は実質的な社会生活に力を持たないことになる。関田寛雄牧師は、それを批判して、人間の直接性(地縁、血縁、利益共同体、権力共同体)は、終末的(最後には)止揚(破壊してさらに高められる)されるべきものと捉える。この「血から契約へと」両者の関係を「止揚(アウフヘーベン・哲学用語)」として生きることが、信仰生活の日々の自覚、あるいは闘いの問題である。
- 3、「神は眠っている時にも(無自覚なときにも)、なくてならぬもの(契約の關係)を与えられるからである」(口語訳)とは慰め深い言葉である。「いざに彼は愛する者に眠りの間によきものを給う」(関根訳)。「契約の關係」、「人格關係」、広くは「人間を対等の人間として尊重する關係」は「よきもの」である。これは「主が家を建てる」ことの内実的意味である。われわれは人間の直接性に埋没していることが多い。知らない間に、権力や暴力(武力)、地縁血縁への寄り掛かりに生きている。その無自覚を超えて、神は働き給う。だからこの罪多きものも生き、働くのだ。